

越後平野で繰り返された地震

河内一男(新潟薬科大学)

Earthquake that was repeated at the Echigo Plain

Kazuo Kawauchi (NUPALS)

江戸期に越後で起こった二つの被害地震(i)1670年四万石地震(西蒲原地震)と(ii)1828年三条地震については、これまで被災地の特定に関する議論があった。本論では古記録にある「波のやってきた方角」の記述を吟味し、震央は越後平野中央部(現在の長岡市と新潟市の間)であることを示し、その後も繰り返される中小地震の解析を併せて、この地域での既知の活断層に囚われない新しい地震テクトニクスを提案する。

二つの地震では揺れの伝わった方向が観測された。それぞれ河内・大木(1996)、河内(2002, 2010)に基づいて紹介する。

(i) 1670年四万石地震(西蒲原地震)の場合

寛文度の地震 寛十庚戌年、五月五日四ツ時より大地震、西南の間より動出し、山も抜、家も潰、その年ハ度々震り申候、依テ假小屋懸ケ、二十日も三十日迄も罷在候 (図の A) (『中蒲原郡誌上巻』[新潟県中蒲原郡役所(1918)]による)

(ii) 1828年三条地震の場合

・大風起り渺々と吹き渡り候内、何の音と申す義相分からず、遠方にて物の轟き候声、風に乗り相聞こえ候うち、忽ち大地震西から東へ揺り来たり…。(図の B)

・風音に交じり、何か鳴動仕り候声これあり、何事にて候かなと四方見回し候うち、江堀の内へ振り転がり、起きあがり候義相成らず…。岸に掴まり見受け候ところ、四面平地大波の如く撼れ立ち、その波西より来たり、東の庄瀬村の方へ参り候につき、よく見留まり居り候えば、庄瀬村は右の波影に…。見えつ隠れつ致し候。(図の B)

・入倉新田名主源兵衛、蔵内村名主勘右衛門、(中略)十二日早朝兩人引き取り、鴨ヶ池村を通路縄手道半途(原文のまま)へ出懸け候処、西南の間より俄に烈風吹き来たり、迅雷の如き音仕り候に付き、果たして大荒れと心得、立ちかね候かと思ひ候うち、即時に兩人共、後ろへ取り転び、狼狽(あわてて)起きんと仕り候処、また前へ倒れ、勘右衛門義は田方へ落ち、誠に夢の如し。右の中(うち)、その辺の田方の一円は波濤の如し。木々は地を薙ぐに等しく、所々俄に煙気が立ち、乾

き居り候田方に忽ち泥水が押し流れ申し候。(図の C)

・十二日朝五つ時西の方より迅雷のごときさまざま音仕り大地震ゆり来たり申し候。それより十四日の中は西の方にて土中雷鳴の音、間々相聞こえ申し候(図の D)

(以上は小泉其明・蒼軒が筆写した新発田藩領の被害記録「組々書上帳」による)

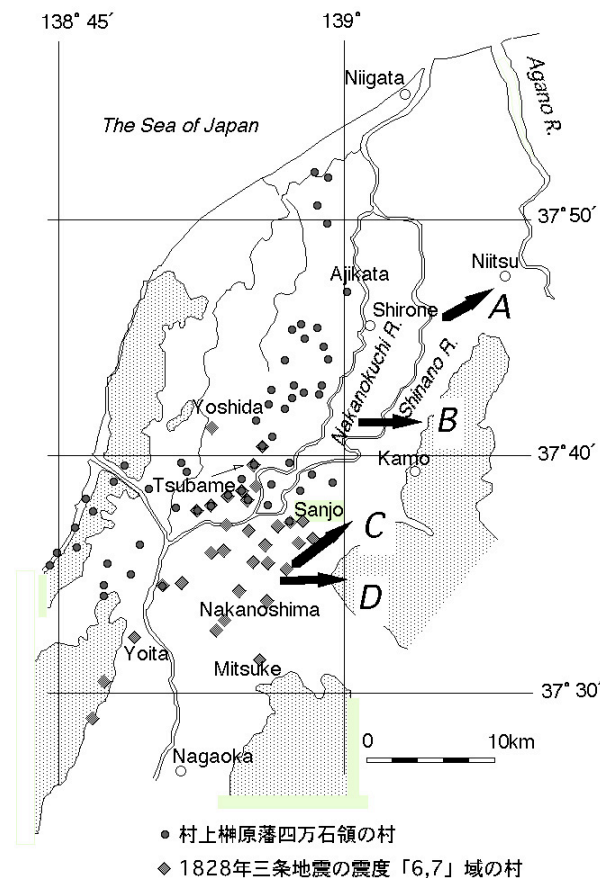


図 1670年と1828年の地震の際に目撃された「震動」の方向。A～Dは本文参照。前者は正午頃、後者は午前8時頃に発生した。野良に出ている農夫は多かったらう。現在でも越後平野では20～30kmを見渡せる地域が少なくない。